

## 海上自衛隊呉地方總監部第一庁舎（旧帝国海軍地方本部）

帝国海軍の旧地方本部は、急速な軍拡期に建設された。この拡張は 19 世紀半ばに始まったが、欧米列強の圧力を受けて、日本政府は優れた海軍力を使って貿易のために国境を開くように圧力をかけた。海軍の防衛力を強化するため、日本政府は 1886 年、広島県の呉湾、神奈川県横浜須賀湾、長崎県の佐世保湾、京都府の舞鶴湾の 4 つの天然港を主要な海軍駐屯地に指定した。これら 4 つの海軍駐屯地にはそれぞれ地方司令部が建設された。

海軍司令部の建物は 1907 年に完成した。第二次世界大戦の終盤には、建物はほぼ全焼し、レンガ造りの外壁だけが残された。その後、BCOF はこの建物を修復し、1956 年まで本部として使用した。以来、海上自衛隊呉地方本部として使用されている。

建物の玄関前に立っている松は、明治時代（1868–1912）に植えられたものである。かつてはもっと背が高かったが、BCOF の司令官が執務室からの視界を遮ると考え、厳しく剪定していた。海上自衛隊はこの松を維持管理し、海軍のシンボルとして錨の形に手入れしている。松の向かいにある池は、その独特の形と階段からも分かるように、かつては秘密基地の入り口だったと考えられている。また、入口の南側にある大砲も謎に包まれており、海軍基地よりもはるかに古いもので、いつ、誰が呉に持ち込んだのか、誰が持ってきたのかは不明である。

総監部庁舎 2 階南側の部屋は、かつては海軍総司令官の執務室として使われていた。現在は海上自衛隊もこの部屋を使用している。しかし、占領下では、それまで皇族や要人だけが使用していた中央の部屋を、海自の司令官が代わりに使用した。建物の北側には、急な石段があり、港へと続いている。この石段は、天皇をはじめとする要人が船で訪れたときに備えて作られたものである。

建物の裏口のすぐ横にある金属製のハッチは、1942 年から 1945 年にかけて建設された複雑な地下トンネルへの入り口を示している。現在、地下トンネルシステムの半分以下が探索されている。